

短編 “The Little Wife” に見る William March の世界

宮内 妃奈

Alabama州Montgomeryのホテルに仕事で滞在していたJoe Hinckleyのもとへ、1通の電報が届いた。予定日より1カ月早い出産によって、妻Bessieが危篤であるという。ジョーは列車に飛び乗り、妻のいるMobileへ向かった。列車に乗ってほどなく、彼はベッシーの死を告げる「であろう」2通目の電報を受け取る。妻を突然失うかもしれないという息の詰まる恐怖と不安に襲われ、ジョーは読む勇気を出すことができず、電報を破り捨ててしまう。ジョーは妻の死に直面することを先延ばしにし、モービルに到着するまでの数時間、極度の興奮状態で「狂ったように」¹彼女のことを話し続けるのだった。

これは、1928年にWilliam Marchという作家が書き、1930年に雑誌*Midland*に発表された短編 “The Little Wife” の内容である。作家名を知らなくても、物語を知っている読者は多いかもしれない。というのも、発表以来、この作品はEdward O'Brienの『ザ・ベスト・ショート・ストーリーズ』シリーズの1930年版を始め様々なアンソロジー（10冊以上）に収録されており²、加えて、日本においては、南雲堂から出版されている大学用テキスト『アメリカ作家名作短編』に掲載されているという経緯がある。

戦争体験を小説にすることによって執筆活動を始めたマーチにとって、「リトル・ワイフ」は、南部を舞台にした初めての作品であるが、それは、戦争小説でも発揮されたリアリスティックな技法で主人公ジョーの追い込まれていく心理状態を描いており、高く評価されている。Michael Routhは本作を“the fiction of pressure”³と呼び、マーチが得意とする、予期せぬ出来事やトラウマによる「精神崩壊」に焦点を当て分析しているが、これはすなわ

ち、戦時であれ平時であれ、マーチの関心が、外的要因によって影響を受ける人間心理にあったことを改めて認証するものである。

本論は、初期作品であるこの「リトル・ワイフ」について、ウィリアム・マーチ世界の全体像からの読み直しを図り、本作に込められているマーチ的要素を探ることを目的とする。本作で描かれている様々な要素は、マーチの世界の原型的要素として、その後制作される長編や短編で繰り返し描かれているのではないか。だとすれば、どのような主要テーマが本作に内包され、どのように描かれているのかを概観し、その後深められていくことになるウィリアム・マーチの世界との相関を見てみたい。

1. モービル—モンゴメリー沿線

「リトル・ワイフ」の作品の舞台は、アラバマ州モンゴメリーからフロートンを経由して、モービルへ向かう列車の中に設定されている。1920年代後半はまさに、輸送・交通手段の主流は鉄道であり、アメリカ全土に線路が敷かれた全盛期である。物語の背景にこの沿線が用いられた理由は、モービル出身でビジネスマンであったマーチがよく利用した鉄道であるという事実が浮かび上がるだろう。

今作においてモンゴメリーは、金物売りの移動販売員としてジョーが取引先の会社との打ち合わせや商談を行うため、滞在していた一時的な場所である。従って、ジョーにとってモンゴメリーの町が内包する意味は「仕事」、「緊張」、「短期」という具合に、その他の都市と取り換え可能なものである。一方、ジョーがベッシーと結婚し、家を建てた場所であるモービルは、モンゴメリーとは対極の意味を持つ。すなわち、「家庭」を想起させ、「安心」を与え、「永久」的な意味を帯びているものである。その町のイメージが、ベッシーの死によって突然、覆され、ジョーにとって「崩壊」と「不安定さ」を暗示する場所に変化する。そのような安定から崩壊の意味を帯びる町に、「モービル」が選ばれていることに注目したい。

「リトル・ワイフ」のように、モービルの町が、人の「死」によって決定

的に不安定な意味を持つ場所になるエピソードは、実は、その後の作品でも繰り返し用いられているモチーフなのである。第4作の*The Looking Glass*では、モービルは「死神の妻」の異名を持つVirginia Owenの生まれ故郷である。彼女がモービルで得たものは、母の死による「死」への恐怖、さらには父親の死による、無償の愛、家族の喪失であった。また、第6作*The Bad Seed*の舞台は明示されていないが、作品に表れている地理的描写や雰囲気からモービルであると、William T. Goingは指摘している。⁴ 連続殺人事件の舞台がモービルであるとすれば、モービルの町とマーチの「死」のイメージの繋がり、決して偶然の産物ではないのではないか。そもそもモービルは、マーチの生まれ故郷であるが、家族とともに引越した後は、仕事の関連で住んだことはあったが、生涯の場所としては選ばなかった。マーチ自身の何らかの伝記的事象が、モービルの町と「死」を結びつけている一つの要因として読み取ることも可能であるかもしれない。

その他にもモービルの町は、「逃亡先」という否定的な意味が込められ、使われている。例えば、第3作*The Tallons*では、Andrew Tallonの双子の兄Jimが逃走した場所として言及されており⁵、また、南太平洋上の島で伝道師として生活する夫婦を描いた第5作*October Island*では、モービルは物語の舞台と遠く離れた場所であるにも関わらず重要な場所として描かれている。主人公Irma Barnfieldの人生に大きな影響を与える姉Lurlinが最終的に逃亡先として選んだ場所がモービルであった。イルマにとっては、モービルはラーリンの残した遺産の相続を可能にした場所であると同時に、姉の死をもたらした場所でもある。⁶

最後に、モービルとモンゴメリー間の地理的世界について触れておきたい。ジョーが移動する地理上の範囲は、その後のマーチの世界が展開する主要な領域となっている。マーチはこの沿線上に、William FaulknerのYoknapatawpha地方のような架空の世界Pearl Countyを生み出している。その中心にあるのがReedyvilleの町であり、その周辺に*Come In at the Door*の舞台となるHurry家の山、Tarleton家の店、『タロンズ』のタロン家の畑、そして、彼らの土地を買収して生まれた、製材所を中心とする新興の町

Hodgetownが広がっている。マーチは、「リトル・ワイフ」以降、この地方に住む家族についての物語を多数制作し、マーチ独自の世界を作り上げている。「リトル・ワイフ」に登場する、モンゴメリーからモービルをつなぐラインは、まさにその後のマーチの物語の主軸となっているのである。

2. 一般的な普通の人

1920年代の南部において、出張販売の仕事は主な職業の1つであった。綿や砂糖、たばこの栽培といった農業が主流であった南部だが、戦後は確実に北部の産業化の波が押し寄せており、主に北部が生産した製品を売る仕事に就く人が増えた。マーチの短編には、綿製品を扱うJoe Cotton (“Woolen Drawers”) や靴を販売するJohnnie Holliday (“The Shoe Drummer”) など、当時の南部社会を反映する職業としての出張販売員が登場している。もともとマーチはWaterman Steamship Corporationに勤めており、様々な場所に出張し取引に携わった経験がある。この「リトル・ワイフ」は、実際、出張先で彼が目にした些細な出来事から生まれたものであり、まさにマーチのビジネスマンとしての知見が反映されていると言える。ある日、マーチは、ホテルのロビーで電報を受け取った男性を目にする。その男性は電報をもらってそれを読むや否や顔色を変えると、電報を破り捨てたという。そして何もなかったかのように仲間の下へと戻って行き談笑した。⁷この名前も知らない、たった一度しか目にしていない男性の光景が基となって、金物の出張販売員の仕事をしている「少し平凡な名前」(22)のジョー・ヒンクリーが創造されたのだった。

ゴーイングはマーチの描く対象について、同時代の作家であるフォークナーやCaldwellと比較して次のように述べている。

Unlike Caldwell and Faulkner, March depicts his Reedyville with more attention to the *average* and the *daily* – the total fabric of the town. ...Reedyville is the South, but it is also Everytown.⁸

このゴーイングの指摘する普通の人々から成る「どこにでもある町」といった普遍化の特徴は、第一次世界大戦を題材にした113人の兵士の小話から構成される *Company K* の中で、マーチの分身でもある Joseph Delaney が自問した思いに通じるものでもある。⁹

I say to myself: “I have finished my book at last, but I wonder if I have done what I set out to do?”

Then I think: “This book started out to be a record of my own company, but I do not want it to be that, now. I want it to be a record of every company in every army. ...”¹⁰

マーチの描く対象は、舞台が南部であれ、ニューヨークであれ、戦時下であれ平時下であれ、どこにでもいる、ありふれた普通の「人間」であり、そこに普遍的な人間の本質を見つめようとする。ジョーはそのような、どこにでもいる人間の代表的存在である。

3. 黒人の描写

マーチの作品には普通に当たり前に白人のそばにいる存在として黒人が登場する。「リトル・ワイフ」においても、黒人のポーターがジョーに2通目の電報を届け、列車からの風景として、つぎはぎのピンクのドレスを着た黒人の少女が線路脇までやって来て、手を振る仕草が映し出されている。

マーチは、人種問題について、フォークナーが南部の抱える社会問題として提示したようにはアプローチして来なかった。例えば、1932年に *Story* 誌に発表された短編 “Happy Jack” は、マーチの作品の中でも人種問題に対する最もショッキングで暴力的なテーマを扱った作品である。リーディビルの町で白人女性と暮らしていた黒人男性がリンチによって去勢された。その暴力に疑問を呈し、町の人々に間違いを訴える白人男性ジャックであるが、結局、それは無益な行為でしかない。彼は最終的に、自ら精神のバランスを崩

し、狂人となって生きるのだった。この作品に対して、シモンズは、確かに、今作品はフォークナーの作品同様、ショッキングなものであると認めてはいるが、違いとして、結局のところ、マーチは現実としてそこにあるもの以上の何物をも映し出そうとはしていないと指摘する。マーチの人種の問題は、「ヨクナパトーフア年代記のように、グラン・ギニョール（見世物）の世界」に陥ることはなく、読者にとって、彼の描く現実はそのにあるものであり、暴力を被る側にも攻撃する側にもどちらにも与しない「日常性」を目の当たりにさせられるだけだと述べている。¹¹

一方、Glosterは、黒人を扱った数多くのアメリカ小説について考察する中で、マーチの作品に表れている、南部黒人の置かれた状況への「抗議」の姿勢について指摘している。グロスターは、逃亡した黒人とその黒人に暴力を振るった白人男性の物語である“Runagate Nigger” (1938)と白人少女の壮大な葬式に憧れ、自殺する黒人少女を描いた“The Funeral” (1939)の2作を取り上げている。その中で、彼はマーチの「抗議」は、黒人の置かれた“plight”（「苦境」）に対するものであると言う。¹²

マーチは、黒人、またその黒人と共に生きる白人についても、彼ら双方の持つ暴力性や偏狭な考え方、強かさ、無知、といった人間性に焦点を当て、一人の「人間」を描いている。『カム・イン・アット・ザ・ドア』のChester HurryとともにBaptisteに呪いをかける黒人乳母Mittyの浅はかさと無知、バプティストの無益な知性、フォークナーのJoe Christmasのように黒人の血を忌避し自らのアイデンティティの確立に失敗する『鏡』の白人男性Manny Nellohaの偏狭さ、黒人の血を利用して歌手として成功するHoney Boutwellの強かな大胆さ、などに深く研究する余地が残されている。本論では、「リトル・ワイフ」においては、列車に手を振る女の子の「つぎはぎの」(16) 服のように、ありのままに現実がさらりと示されている、と指摘するに留めておきたい。グロスターの指摘のように、「抗議」であるかどうかについて、また、マーチが黒人の置かれた状況を「苦境」と捉えていたかどうかについては、また別に丁寧な検証が必要であるだろう。

4. 死に翻弄される姿

冒頭でも指摘したが、「リトル・ワイフ」の評価は、マイケル・ラウスが “stories of the breaking point” (106)と呼ぶように、列車が町に近づくにつれて妻の「死」と喪失の不安に精神的に追い詰められていくジョーの姿にある。

私たちは、“whoever we are, good or bad, young or old, educated or ignorant, sooner or later we are forced into situations we do not understand”（「どんな善人でも悪人でも、若くても年を取っていても、また知識があってもなくても、自分が理解できない状況、あるいは、対処の仕方がわからない状況、そして、それに感情が伴わない状況に陥られるという経験を遅かれ早かれ必ずする。」）¹³マーチはそのような誰もが経験するであろう様々な究極の状況に関心を持ち、予期せぬ出来事が起きた場合に、その状況に困惑し、圧倒される人間が取る異常な行動や脆弱性、恐怖心や不安による極限の心理状態を描くことを好んだ。特に、彼は「死」を、一つの理解し得ない究極の状況として捉え、それに翻弄される人間の姿を繰り返し描いている。その根源にあるものは、Stanley Edgar Hymanが指摘するように、マーチが体験した戦争での「罪の意識」であり¹⁴、人間同士が殺し合うという圧倒的暴力性への衝撃、人間の根本的本質への懐疑及び幻滅である。

マーチは『カンパニーK』で、まさに殺戮による死の恐怖と贖罪の意識に駆られ、自己のアイデンティティが崩壊し、狂気の世界に没する多くの男たちの悲劇を明らかにしたが、その後は「リトル・ワイフ」のジョーのように、日常生活における死の脅威に関心を向けている。特に、南部を背景に描かれた最初の長編『カム・イン・アット・ザ・ドア』には、妻の死によって生きる力を失うRobert Hurry、呪いをかけられたことを知り、精神的に追い詰められて殺人を犯してしまう黒人男性バプティスト、そのバプティストを代理父として慕いながら、彼に対して死の呪いをかけることに加勢してしまい、罪の意識と喪失感によって生死を彷徨う主人公チェスターが描き出されている。特に、バプティストが絞首刑に処せられ、その現場を目撃したチェスターは、「死」と「喪失」、「贖罪」に翻弄される。バプティストの記

憶を失い、自己のアイデンティティをも喪失した彼は、家族の下を離れ、親族と過ごすことで自己を取り戻し成長していくのであるが、自らの中にある言葉にならない「欠けているもの」をイメージとして捉え、無意識下に押し込められたバプティストの記憶を手繰り求めて生きた結果、彼が得たものは「破滅」であった。¹⁵

『鏡』のヴァージニア・オーウェンも死の犠牲者である。彼女の場合には、幼くして母を失い、自らの悲しみや混乱する心中を表現するための言葉を持たないゆえ、恐怖のイメージが先行して彼女の精神を支配してしまう。ヴァージニアは、自分が愛したものすべて（母、ペット、父、そして結婚を約束した男性）が、地球に「飲み込まれ、食べられた」結果、死神と契約を結ぶのだった。そして、彼女を持ち受けているものは、96歳になっても尚、死の安楽が訪れず、もがき苦しむ姿である。

妻の死を知らせる電報を破り捨てたジョーを待っていたものも、「死」の事実を受け入れさせられるという現実であり、「死」に対して無力な人間の姿が露呈されている。

5. 「話す」という行為

ジョーは不安を解消するため、ひたすら「話す」という行為に囚われた。5時間という列車の移動中、同じ車両に乗っていた女子学生や老夫婦に、ベッシーとの出会いから結婚生活について、「話している限り、ベッシーが生きている気がして」(28) 語り続けた。彼らにとってジョーは「酔っぱらっているのか」(26)、「コカインを使っているのではないか」(30)と思わせるほどであるが、彼らはただひたすら話を聞かされている存在である。このジョーの語りは双方向のコミュニケーションを取るといった類のものでは決していない。コミュニケーションとしての言葉が持つ本来の機能、意味を伝え、共感し合う、という働きを失っている。すなわち、一方的な「提示」に過ぎないジョーの「語り」は、自分の精神を落ち着かせるための重要な「表現」であり、これは「書く」ということが自らのセラピーであったウィリアム・マ

ーチに繋がるものである。戦争のトラウマと闘うために書き始めたマーチの作品に対する姿勢そのものと類似していると言えるだろう。¹⁶

マーチの作品には、他にも極限状態で、一方的に書いて「表現」することによって自分を見つめる人物がいる。『鏡』に登場するマニーは、自分に黒人の血が混ざっているのではないかという恐怖から、偏執病的ナルシズムに陥り、異常なまでに一人の女性、Clarry Palmillerに執着する。彼は、クラリーへの偶像崇拝的、狂気に満ちた想いを、送られるはずのない手紙に「毎日」したためる。¹⁷ 同様に、自らの混乱した思いを投函されない手紙に書き連ねる人物が、『悪い種子』の悪鬼Rhoda Penmarkの母、Christineである。ローダの通う学校の遠足で一人の生徒が溺死した。事故のように見えたが、実は、ローダが殺害していたのだった。この事件の真相を知り、子育てに悩むクリスティンは、単身赴任で家にいない夫に何度も手紙を書き、自己の不安、悩みを吐露している。決して投函されることのない手紙は、娘の犯罪を知り、それに対する責任と不安、言葉にならない恐怖に満ち、彼女の精神状態が崩壊していく様を映し出している。¹⁸

ジョー、マニー、クリスティンに通じる行為は、精神の崩壊と追い詰められる心理状況に対して、「応答を期待していない」言葉を発していることである。彼らの言葉は決して誰にも届かない。ここに、マーチの徹底的に「人間は孤独である」という本質が表れていると言えるだろう。Richard Crowderの指摘を借りれば、マーチにとって「コミュニケーションは不可能であり、人は自分を頼るしかなく、孤独に生きていくしかない」¹⁹ ということだ。さらに踏み込むとそれは、言葉自体に対するマーチの不信、言葉では決して本質を突く（物事を的確に表現する）ことはできないという不信、にも繋がっているようである。

真理を言葉で表現することへのマーチの不信感は、『カム・イン・アット・ザ・ドア』のWhispererの「作家」の物語に表れている。全く何も書けない日々が続いた後、ある日、彼は自分が好きな美しい光景に活力を得、それを言葉にしようとする。しかし、結局、言葉になったものを読み直し、たどり着いた結論は“Nothing that is true will ever be said.”²⁰ という絶望であ

った。

最後に、本質的な意味は言葉で伝わらなくとも、「感情」を伝えるということ、それについては、マーチの作品を論じる上で押さえておきたい点である。すなわち、ジョーの語りを、言葉というより、心の悲痛であり悲劇性を帯びた「感情」そのものとして捉えてみるのである。ジョーの不安、マニーの偏執的な愛の吐露と自己暗示、クリスティンの悲鳴が言葉に乗って表れている。マーチは画家Chaim Soutineに傾倒した。ロシア生まれのフランス画家スーティンは、本江によれば、激情によって絵画を作成した最も病的な内向的な画家であるという。²¹ マーチが、スーティンの絵画に「感情」を感じ取り、それに傾倒したとすれば、（それがスーティンの魅力であるが、）まさにそこにマーチの「創造」に対する姿勢と通底するものが見い出せるのではないか。内向的で病的なマーチとスーティンの類似性を看過することはできない。

「リトル・ワイフ」で描かれている様々な要素は、その後の作品の中に繰り返し現れ、深められ、マーチ独特の世界が作り上げられていった。FreudやJungに詳しく、人間の心理に迫った作家が描いた様々な人物像は、時代を超えて現代の人間にも通用する普遍性を帯びている。本来なら、マーチの精神分析的知識を鑑みるのであれば、マーチの作品における父性や母性、男性像及び女性像は、大きな研究テーマとなるはずである。「リトル・ワイフ」においては、そのタイトルの通り、ベッシーを“a little wife”と表現するジョーの男性性、生まれた子供に対するジョーの「父性」の脆弱さ、ヒンクリー家で暮らす義理の母の存在と同時にジョーの両親の不在など、多数、考察すべき点があるのは事実である。しかし、本論ではあえてこのジェンダー批評に深入りすることは避けた。マーチの作品については、フォークナー作品にも通じるような「父性の欠如」や「歪んだ父性」が数多く描かれ、女性を主人公とする長編作品の『オクトーバー島』や『悪い種子』、その他数多くの短編の中には、興味深い女性像が表れている。これまでマーチの作品について本格的にジェンダー批評を行っている批評家はいないため、改め

て、考察するつもりである。

本論では、『カム・イン・アット・ザ・ドア』の妻を失った男性、チェスターの父ハリーや『鏡』のヴァージニアの父のように、子供を育てる自覚を喪失した「父性」を鏡として、そこから予想されるジョーの父性を思い浮かべながら、結びとしたい。

【註】

¹ *The Little Wife and Other Stories*, p26. なお、これ以降の原文の引用（訳は宮内による）は、頁数のみを本文に示す。

² Simmonds, *An Annotated Checklist*, p33-35.

³ Routh, p107.

⁴ Going, *Essays on Alabama Literature*, p111-112.

⁵ 『タロンズ』の基となっている短編 “The Unploughed Patch” では、ジムの逃走場所はバーミングラムであった。

⁶ 『オクトーバー島』の前に書かれた同名の短編 “October Island” では、モービルは出てこない。

⁷ Simmonds, *TWWM*, p32.

⁸ Going, *Essays on Alabama Literature*, p109.

⁹ “An Unending Circle of Pain” (37) でシモンズは、ディラニーをマーチの “alter ego” であると指摘している。『カンパニーK』における普遍性とリアリズムについては、拙著「21世紀に読むWilliam March」の中で考察している。

¹⁰ *Company K*, p13.

¹¹ Simmonds, *TWWM*, p112.

¹² Gloster, p206.

¹³ Routh, p108.

¹⁴ Hyman, p188.

¹⁵ チェスターの無意識については、拙著「扉の向こうに」において考察している。

¹⁶ Going, “Regional Perspective and Beyond”, p432 ; Simmonds, *TWWM*, p31.

¹⁷ マニーの偏執的ナルシズムについては、拙著「1943年製『鏡』に映るもの」で考察した。

¹⁸ クリスティンの崩壊していく精神状態については、「不安の時代」の中で、50年代のアメリカ社会の在り方に照らし合わせて考察した。

¹⁹ Crowder, p120.

²⁰ *Come In at the Door*, p342.

²¹ 本江, p11.

【引用文献】

- Crowder, Richard. "The Novels of William March." *University of Kansas City Review*. 15. Winter. 1948, pp. 111-129.
- Emerson, O. B. "William March and Southern Literature." *Carson Newman College Faculty Studies*. 1. 1968. pp. 3-10.
- Going, William T. *Essays on Alabama Literature*. Studies in the Humanities. Vol. 4, U of Alabama P, 1975.
- . "William March: Regional Perspective and Beyond." *Papers on Language & Literature*, 13. 4. 1977. pp. 430-443.
- Gloster, Hugh M. *Negro Voices in American Fiction*. New York: Russell & Russell, 1965.
- Hyman, Stanley Edgar. "Alabama Faulkner." *New Republic*, 108. 1943. pp. 187-188.
- March, William. *The Bad Seed*. 1st Ecco pbk. ed. ed. Harper Collins, 1997.
- . *Come In at the Door*. New York: Harrison Smith and Robert Hass, 1934.
- . *Company K*. The Library of Alabama Classics. U of Alabama P, 1989.
- . *The Little Wife and Other Stories*. New York: Harrison Smith and Robert Haas, 1935.
- . *The Looking Glass*. Boston: Little, Brown and Company, 1943.
- . *October Island*. 1st ed. Boston: Little, Brown and Company, 1952.
- . *The Tallons*. New York: Random House, 1936.
- . *Trial Balance : The Collected Short Stories of William March*. The Library of Alabama Classics. U of Alabama P, 1987.
- Routh, Michael. "The Fiction of Pressure: William March's Short Stories." *Mississippi Quarterly* 36. 2. 1983. pp. 105-115.
- Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. U of Alabama P, 1984.
- . "An Unending Circle of Pain: William March's Company K." *Ball State University Forum*. 16. 2. Ball State U, 1975. pp. 33-46.
- . *William March: An Annotated Checklist*. U of Alabama P, 2015.
- Alfred Werner著 *Soutine* 「世界の巨匠シリーズ」 本江邦夫訳、美術出版社、1978年、
- 宮内 妃奈 「1943年製『鏡』に映るもの」『福岡女学院大学短期大学部紀要（英語英文学）』53号、2017年、p1-16。
- . 「扉の向こう側—William Marchの*Come in at the Door*を読む」『福岡女学院大学短期大学部紀要（英語英文学）』54号、2018年、p1-16。
- . 「21世紀に読むWilliam March—もう一人の『失われた世代の作家』」『福岡女学院大学短期大学部紀要（英語英文学）』51号、2015年、p17-29。
- . 「不安の時代—*The Bad Seed*の暴力」『福岡女学院大学短期大学部紀要（英語英文学）』52号、2016年、p17-31。